第九章　東海道

鎌倉を去って、京の都へ旅立つ日が来た。
郷子は、比企尼その他の親族へ別れの挨拶を終えた後、最後に母の河越御前に会って話す機会を得た。
「母上、行って参ります」
「道中気をつけて」
「兄の小太郎と重員が一緒ですから安心しています」
「義経さまとは、仲睦まじゅうして、早く子を生しなさい」
「母上、父は女遊びなどされなかったのでしょうか」
「なぜ、そんなことを訊くのですか」
「頼朝さまも義経さまも兄弟揃って、色事がお好きだと訊いたものですから」
「誰がそんなことを！」
「皆知っているとのことでございました」
「いや、御所さまは、色々浮気はされているが、心底好いているのは、御台所さまですよ。御台所さまが、正室としてしっかり家を守っているので、安心して、お遊びなされているのです。家庭を壊す気は全く無いと思いますよ」
「政子さまは、嫉妬深いとか」
「それも、愛情の表れです。あれでなかなかうまく行っているのですよ。夫婦喧嘩は、犬も食わないと言いますからね」
「それでは、父上は？」
「そうね。わたしはあの人の子を六人も産んだのですよ。それで判るでしょう」
「では、母上以外の女性とは何も無かったのでしょうか」
「少なくとも河越では、何も無かったと思いますよ。側室も妾も愛人もいなかったし・・・・でも、仕事で、武蔵国府にはちょくちょく出かけていましたからね。また、出陣して京の都と河越との間を何度も往復しています。旅の宿泊所には、遊女が沢山いるのですから、なにがあってもおかしくないでしょうね」
「母上は気にならないのですか」
「知らないのですから、気にしてもしょうがないでしょう」
母は、羨ましいほどおおらかだった。
「義経さまには、静御前という愛人がいるとか」
「静御前は、白拍子で殿御を男舞で楽しませるのが商売。貴女は、正室なのだから気にかける必要はありません」
「でも、愛情の無い結婚ほど惨めなものはないでしょう」
「大丈夫。貴女は、誰からも好かれますよ。もっと、自信を持ちなさい。御所さまと御台所さまも武家同士の結婚。あなたも武家の娘なのだから、義経殿も白拍子などよりきっと

あなたの方が頼りになるし話も合うと思いますよ」
郷子は、母の言葉をそのまま受け取る事にした。まだ、会ってもいないのに、いまから心配しても仕方がない事だった。
郷子上洛のために編成されたのは、隊長を小太郎重房、副隊長を三郎重員とし、武士は河越氏の郎党が十三人に比企氏からも五人が参加した。その他、牛飼い童、下僕、下婢など合わせて十名。それに、志乃の他に、もう一人、**須美**という侍女が付き添う事になった。
須美は、いままで大蔵御所付きの侍女であったが、政子さまの御声掛かりで新たに郷子付きになったという。年の頃は、もう三十を超えていようが、非常に落ち着いているが動作はきびきびした女性だった。
郷子は、自分一人の上洛のために都合三十二人の人員と五台の牛車が部隊として編成されたことに、すこし気恥ずかしく感じたので、母に訊いてみた。
「すこし仰々しすぎるのではありませんか」
「御所さまの弟君に輿入れするのですよ。河越家としても名誉な事なので、ここ鎌倉でお式をするなら盛大にお祝いするのですが、何分京の都でお式をするということなので、それが出来ません。ですから、この程度のお供で我慢してもらわなくてはならず、気の毒に思っているのですよ」
郷子は、母の気持ちが判った。
都では、義経の正室となれば、それがどんな女性か大変な関心を持って見られるだろう。それで、お供を沢山連れて都に入り、郷子が恥をかかないように気を使っているのに違いない。これは、河越家の見栄でもあるのだ。
新しく侍女になった須美が、郷子のところに挨拶に来た。
「この度、御台所さまから、郷姫さまの侍女になるように仰せつかりました須美と申します。何事でもご遠慮なくお申し付けください」
「御台所さまの御親切痛み入ります。ただ、身の回りの世話は慣れておりますので今まで通りに、志乃にお願いしたいと思っております。網代車には、今までわたしと志乃が一緒に乗ってまいりましたが、まだ余裕がありますので須美殿にも乗っていただければ良いと思います」
「私は徒歩で結構でございますので、お気遣いは御無用でございます」
「それでは、私が三日月に乗らない場合には、使っていただいてかまいません」
「ご配慮ありがとうございます。それでは、時々使わせていただきます」
須美は、折り目正しく腰をかがめた。須美は乗馬が出来るのだ。
一行は、早朝に親族に見送られて比企谷殿を出立した。河越館や武蔵国府で起こったような、義経の正室を一目見ようとする庶民による騒ぎは全く見られなかった。
網代車の中で郷子が志乃に訊いた。
「あの須美という方は、何をしていただけるのでしょうか。貴女は聞いていますか」
「あの方は、都暮らしが長く、都の生活をよく知っているとのことでした。

都の貴族社会には、色々な仕来(しきた)りがあり、それを知っていないと貴族に馬鹿にされるのだそうです」
「例えばどんなことですか」
「牛車は、後ろから乗りますが、降りる時は前から降りる仕来りだそうでございます。木曽義仲殿は、院の御所に伺候した時に後ろから降りたので、貴族に田舎者とさんざん馬鹿にされたそうです」
「でも、前から降りるためには、牛をどかさなければ降りられないではないですか。牛を長柄から外す間、牛車の中で待っているのでしょうか」
「貴族は、自分で勝手に仕来りを作り、それを守らないものを軽蔑するのだそうです。表では、義仲殿を旭将軍と褒め称えておきながら裏では木曽の山猿とさんざん罵っていたというのですから酷い話です」
「まあ！恐い」
「京では、貴族のお宅に御呼ばれして、すぐに訪問するのは失礼に当るそうです」
「御呼ばれして、断ったら失礼に当るのではないですか」
「いいえ、京では、最初御呼ばれしたら、まず、自分などあなた様に御呼ばれされるほど価値のある者ではございませんと、謙遜するのだそうです。そして、二度お断りして、三度目も御呼ばれしたらやっと、正式に御呼ばれしたものとして、訪問できるとのことでございます。また、御呼ばれして、
『いや、まだよろしおすやん。お茶漬け一杯でも食べていっとくれやす』といわれたら、そろそろ帰る時間ですよという意味だそうです」
「私など、とても貴族の方などとお付き合いできそうにないわ」
京の習慣は、郷子の理解の限度を超えるものだった。あの須美という侍女がその辺りの機微を教えてくれるのだろうか。
「時々、須美殿と御一緒に歩いて話を伺いたいと思いますが、よろしいですか」
「面白い話を聞いたら、教えてくださいね」
志乃は、手を軽く上げて了解したと合図を送ってきた。
網代車の御簾を透して、富士山が見えた。入間川から見た富士山と比べ比較にならないくらい巨大だった。いま将に富士の麓を通っているのだ。
郷子は、旅がこれほど楽しいものだとはいままで思ってもみなかった。
かつては、河越館の周辺を乗馬することが好きでそれで満足していた。
しかし、東山道武蔵路を通り、武蔵国府を経て、鎌倉に来て、碧い海を見て、比企谷殿で親族に会い、壮麗な鶴岡八幡宮に参拝し、造成中の大蔵御所で頼朝夫妻に面会し、そして是まで手の届かないところにある霊峰として仰いでいた富士山麓を通っている。
旅の全てが新鮮で、胸がわくわくする高揚感と共に限りない心の開放感を味わう事が出来る。その地域ごとに美しい景色や独特の風習があり、珍しくておいしい食べ物がある。
郷子は、目的地で待ち受けているかもしれない不透明な未来は棚に上げて、都に行き着く

までの旅を精一杯楽しむ事に決めた。
一行が峠で中休みを取っていると、小太郎が網代車に乗ってきた。
「いままで旅の準備で忙しかったから、まともに話す機会がなかったが、久しぶりにゆっくり話をしようと思ってな」
「はい、私も兄上には訊きたい事が沢山ございます」
志乃が、「それでは、私は須美殿と御一緒しておりますから」と言って車から降りていった。
小太郎は、目の大きい鼻筋の通った武者人形のような顔をしている。頼朝が小太郎が美青年で評判といったのも頷ける。小太郎は、兄弟姉妹の自慢の兄だった。学問も武芸も他の兄弟より一歩も二歩も抜け出ていた。綾姫が、小さい時に小太郎兄さんのお嫁さんになるのだと騒いでいたのも無理からぬ事だった。郷子は、兄の顔を見た。頼朝が小太郎兄に似ているといったのは本当だろうか。あまり似ていないような気がした。男と女だ、そんなに似ているはずが無いと思う。
「郷子が、判官殿の正室になるなど予想もしていなかったから、父から聞いたときには驚いたよ」
「それは、私も同じでございます」
「なにしろ、判官殿は、父と俺の上司だからな。しかし、郷子が判官殿の嫁になると父は義父で俺は義兄ということになる。ややこしくなってどう挨拶していいか判らなくなった。まあ、判官殿を義弟扱いするわけにはいかないだろうがな」
「義経さまは、どのようなお方なのでしょう。私は、噂を聞くだけで全く見たこともないのですから」
「まあ、容姿は、会ってのお楽しみということでこの際置いておこう。
いま言える事は戦の英雄で都の女子の間で一番人気のある武将だということだ」
「頼朝さまも義経さまも兄弟揃って女好きだと聞いています」
どうしても、この点が気に懸かる。母にも聞いたが、義経の傍にいて本人を実際に良く知っている兄の意見を聞いてみたかった。
「ははは、確かにそんな噂があるな。ただ、鎌倉殿と判官殿では、少し違うな。
鎌倉殿は、政子さまの目を盗んで密かに囲い者をつくって浮気される。しかし、判官殿は、宴会に女を集めておおっぴらに騒ぐだけだ。とにかく、明るくて陽気なことが大好きだから、男も女も一緒になって酒を飲んで大騒ぎをするのさ。とくに、女のことで心配する必要はないと思うよ」
「静御前という白拍子と相思相愛だとか」
母の話は一般論だから二人の関係をもっと具体的に知りたかった。
「静は、白拍子の名手だから、判官殿が催す宴会には欠かせないのさ。静も、自分は芸人だと割り切っているから正式に判官殿の妻になれるなどとは思っていない。あれは、気風(きっぷ)のいい女だ。郷子ともうまくいくさ」
「そうでしょうか」

（夫の愛人とうまく行くなどということがあるのだろうか）
郷子は疑問に思う。
「鎌倉殿と違って判官殿と一緒にいると楽しいぞ」
「どのようにですか」
「鎌倉殿は尊大に構えているから、こちらも平伏して何事も恭しく申し上げないといけない。また、御意見に反論したり、うっかり、親しげな口調で話そうものなら、ものすごい剣幕で睨めつけられるらしい。
しかし、判官殿には偉ぶったところがすこしも無い。武将にも軍兵にも分け隔てなく親しげな口をきく。気に染まないと怒ったりもするが、からっとして陰に篭る事がない。宴会などでは、自分から軍兵の輪に入って酒をついで回るぐらいだ」
「いつも宴会などをやっていて、よく戦に勝てますわね」
兄相手だから、どうしても口が軽くなる。
「おいおい、もう将来の亭主に説教する気か」
小太郎がにやりと笑う。
「確かに、判官殿を遊び好きで思慮が浅いなどという御家人もいるらしいが、本人を良く知らないからだ。本人は戦の事になると、昼夜を問わず必死になって勝つ方法を考えているのさ。とにかく、いままでの武将と違って発想が豊かで、過去の前例にとらわれない。
例えば、今までの合戦は、まずは、軍兵の数の多寡、次に勇猛果敢な武将がどれだけいるかで勝敗が決まると考えられていた。これは真正面から渡り合った場合には正論かもしれない。
しかし、判官殿は、軍兵の数の多寡よりも、戦略・戦術がより重要な要素と考えている。
つまり、敵が全く予想もしていないような方法で戦いを仕掛ける。
すると、相手が混乱に陥るから、それに乗じてすばやく叩くのだ。
このような戦法を、非難する人もいるが、戦というのは、勝たなければ意味が無い。まあ、若い者が新しく何かをしようとすると、古い者は非難するのが世の常だからな。しかし、判官殿はそんなことは一切気にしていないのさ。
例えば、一の谷の戦だ。郷子も噂を聞いたことがあるだろう」
「平家の十万騎対して、源氏は範頼軍が四万騎、義経軍が二万騎の合計六万騎、義経さまが、三千騎を率いて、鵯越を逆落としして勝ったとか」
「ははは、噂というのは恐ろしいものだな。そんなに尾ひれがついているのか。
数えた事はないが、実際には、みんな話半分だろう。そして判官殿が率いたのは、三千騎程度だったが、その大部分を侍大将の土肥実平殿に預けて明石に迂回させ、自分はたったの七十騎で逆落としをしたのさ」
「たったの七十騎で！　兄上も逆落としに参加されたのですか」
「俺も落ちた。いま考えてもあの時死ななかったのが不思議なくらいだ」
「死ぬのを覚悟で落ちたのですか」

「いや、そうでもない。判官殿はとんでもない無茶をしているように見えるが、あれでなかなか良く考えているのだ。
まず、猟師の若者を見つけて道を案内させ、この崖を鹿が通るかどうか訊いた。
若者が、『通る』と答えると、『鹿すら通る。馬が通れぬことはあるまい』と皆を納得させた。それから、鞍つきの替え馬二頭を崖下に落とした。一頭は倒れたが、もう一頭は全く無事だった。判官殿は『人が乗って、手綱捌きを上手にすれば、恐れる事はない。まず、俺が手本を見せる』といって、落ちて行った。総大将が信念を持ってやると、部下もその勇気を貰って、何でも出来るものさ。七十騎全員、一騎も怯むことなく落ちていった。その結果が大勝利だ」
「そんな風にいつもご自分で先頭を切って突進するのですか」
郷子は、自分の夫となる人の武勇伝に感嘆すると共に、長生きできないのではないかとの不安を覚える。
「そういう人だ。なんというか、戦となるとなにか神がかり的なところがあって、自分は絶対に矢も当らなければ、刀で切られることもないと信じているようなところがある。確かに体から霊気が発散して矢が避けて通っているかのように見えるから不思議だ」
「なんだか近寄りがたいような感じもします」
「いや、今の話は、戦の時だけだ。普段は、賑やかなことが大好きな普通の若者さ。近寄りがたいというようなことはないから安心しろ」
「最近、法皇によって従五位下検非違使に任じられたとか」
「そう。それを祝って大宴会を催し、酔っ払って無邪気に喜んでいたな。喜怒哀楽を率直に表す人だ」
「頼朝さまが、自分の許可も受けずに勝手に任官したと怒っておられるそうですが」
「それはおかしい。鎌倉殿が判官殿に法皇の警護と都の治安を命じたのだ。
都で官職がなければ、警護と治安といってもまるで自警団のようなものだ。何の権限も無いから違反者を取り締まるうえで困る事も多い。しかし、検非違使になれば正当に警察権を行使できるから強権を発動できるし、にらみも利く。だから、その職務を効果的に果たす事ができる。そもそも、本来鎌倉殿が、判官殿に法皇の警護と都の治安を命じた時点で朝廷に検非違使任官の申請をすべきだったのだ。それをしないから、法皇が気を利かして官位を与えたに過ぎない。それを、許可を受けずに任官したなどという言いがかりをつけるほうがおかしい。まあ、こんなことをおおぴらに言うと首が危ないから内緒の話だがな」
「義経さまは、どう思われているのでしょう」
「判官殿は、なぜ鎌倉殿が怒っているのかよく判らないのではないかな。判官殿は、鎌倉殿を兄として慕っているから、出来るだけその命令に沿いたいと思っている。鎌倉殿が、法皇の警護と都の治安をしろといわれれば、そのために全力を尽くす。法皇から検非違使の官位が与えられればありがたく受ける。そうすれば、兄から命じられた仕事がうまくはかどるからだ。それだけのことだ。事前の許可がどうのなどそんな質面倒くさい事には気

が回らないのさ」
「大江殿は、義経さまが一の谷の決戦で英雄になって都で人気が高く、その上、判官という殿上人の官位を得たのは、法皇さまの直属の部下になったことを意味し、東国武士団の棟梁である頼朝さまの地位を危うくする恐れがあると危惧しているようですが」
「大江というのは、公文所の別当になった都の官吏あがりの男だな。あの男がそんなことを言っているのか。大体、あの手の連中は都で人の悪いところばかり見てきたせいか、人は生まれながらの悪人で、自分の利益のみを追求し、そのためなら平気で人に嘘をいい、人の足を引っ張り、人を裏切るなどと思っている。、奴らは善意の人間などはこの世にいないとはなから決め付けているから、善意の行為もすべてねじまげて疑ってかかる傾向がある。俺は傍にいるから判るが、判官殿は、兄者のために命を投げうってでも役立とうとしているだけで、兄に代わってその地位に座ろうなどという考えは、みじんも持っていないことは明らかだ。判官殿は、兄弟の絆・情というものを信じているのだ」
「大江殿は別として、血を分けた兄弟である頼朝さまはどうお考えなのでしょうか」
小太郎は、しばらく考えていた。
「そういえば、こんなことがあった。
鎌倉殿は、富士川の戦で圧倒的な勝利を収め、鎌倉に帰って鶴岡八幡宮の造営に取り掛かったが、その若宮宝殿の上棟式のことだ。鎌倉殿が仮屋の正面に座り、判官殿がその後にひかえて座った。判官殿は、鎌倉殿の部下が自分の部下であるかのごとく上座から見下ろしているように見えた。
判官殿は、頼朝軍が黄瀬川に陣を張っていた時に奥州藤原氏のもとから駆けつけて、その傘下に入ったばかりの時だから、俺達は彼が義朝公の九男というだけで、その実力は誰も知らなかった。だから、鎌倉殿と上座に同席したのを見て、何の実績も無い者をただ、兄弟というだけで重用するのはおかしいのではないかと儀式に参加した誰もが不満に思った。だが、儀式が進むと、鎌倉殿の判官殿に対する存念が明らかになった。
儀式では普請を命ぜられた木匠の棟梁に馬二頭を贈呈することになっていたが、そのためには誰かが社頭に繋がれた馬を木匠の棟梁のところまで曳いてこないといけない。鎌倉殿が、後に控えていた判官殿に向かって、何か言った。恐らく「馬を曳いてこい」と命令したのだろう。判官殿がためらっていると、「俺の命令を聞けないというのか」とそれこそ血相を変えて、儀式に参加している御家人全員に聞こえるように大声で怒鳴った。判官殿は、あわてて立ち上がると馬を曳きに行った。それで、俺達も、鎌倉殿が判官殿を兄弟というよりむしろ家来と同じようにその実績に応じて扱う気であるのが判って納得したのさ。ただ、その後、判官殿が宇治川の戦や一の谷の決戦で勝利を収めたので、いまでは、みんなその実力を認めて敬意を払うようになっているがね」
郷子は、自分が義経の正室として送り込まれる主な目的が、義経に公卿や奥州藤原氏との姻戚関係ができないようにするためだとは、兄に話せなかったが、兄の話から、義経と自分との結婚は、あるいは、義経を家来扱いするための道具としての目的もあるのではない

かと考え、またまた気が重くなった。
「頼朝さまと義経さまは随分性格が違うようですね」
「それはいえるな。鎌倉殿は、配所でずっと監視され続けていたが、判官殿は鞍馬山で放任され自由奔放に動き回っていたから精神的な重圧の差が性格の形成に影響を与えたのかもしれない。それと、一般的に何事にも細心で慎重な嫡男と奔放な末っ子という構図も二人にあてはまるような気がする。また、異母兄弟だから、母親の性格の違いも反映しているだろう。判官殿の母親の常盤御前は素直でおっとりとした性格の女性らしい」
「頼朝さまは、過度に神経質なようにも思われますが？」
「鎌倉殿は、流人生活で長らく死と隣りあわせで育ったためか、他人を信用できずに、わずかな兆候にも直ぐに疑心暗鬼になるのも判らないでもない。なにしろ実際に恐ろしい目に何度もあい、その都度その危険を察知する鋭敏な能力で生き延びてきたのだから。
楽天的な性格の判官殿は、兄の性格がそんな風だとは思ってもいないから、なぜ兄が自分に厳しく当るのか理解できないようで悩んでいるよ」
小太郎が、網代車から降りると、入れ違いに志乃が戻ってきた。
「須美とは、よく話が出来ましたか」
「須美殿は、京でお育ちになったと聞いていましたが、子供の頃の事とて、近頃の都の事情にはそれ程お詳しくないような感じを受けました」
「それでは、なぜ私の侍女に選ばれたのでしょうか」
「さあ、ただ、手に郷姫さまと同じようなたこが出来ていましたから、武芸をなさる方かもしれません」
「それで、乗馬のほうは？　三日月に乗っていましたか」
「それは、まだでございますが、恐らく上手かと思われます」
郷子は、政子が武芸者かもしれない女を郷子の侍女になぜ付けたのかに思いをはせた。
「すこし様子を見守りましょう」
「判りました」
郷子と志乃は目と目でうなずきあった。
鎌倉から京へは、早馬の伝令なら五日から七日で着いてしまうというが、一行は牛車の歩みに合わせて移動するので、どうしても数倍は時間が掛かってしまう。
初秋にかけてまだ残暑は厳しいが、東海道は海沿いの道が続き潮風が爽やかで心地よく旅は快適だった。浜辺を通過する時は、砂浜で中休みを取りしばらく、海を眺めていたりした。郷子は、都で待ち構えている未知の不安を考えると、急いで都に着きたいという気持ちにならなかった。食料は十分に確保していたので、不作のためにまともな食事を準備できない宿屋でも歓迎され、待遇が格別に良かった。
小太郎はじめ一行もこのゆっくりした速度の旅行を楽しんでいるようだった。
東海道も伊勢国に入ると桑名を最後に海沿いから離れて、京都に向けて一路内陸部を進んで行く。

鈴鹿山脈の東麓、伊勢鈴鹿の関が置かれている関宿を過ぎると東の箱根と並んで西の難所といわれる鈴鹿峠の麓にある坂下宿に着く。そこから、阿須波道と呼ばれる八町二十七曲の急な曲がり角が連続する険しい鈴鹿の峠道を越えれば、もう京とは目と鼻の距離にある近江国土山宿にはいる。
阿須波道を網代車に乗ったまま上るのは、さすがに危険なため、郷子は、切袴を穿いて三日月に乗った。志乃も須美も袴をつけて歩いていた。狭く曲がりくねった山道を牛車が通るのは容易ではない。牛飼い童や下僕が悪戦苦闘しながら、どうやら峠の頂に着くかと思われた頃、山の木々の間から三十人ほどの裸に薄汚い麻布を羽織っただけの山賊が手に手に雑刀を持ってばらばらと降りてきて一行を取り囲んだ。武士は二十人もいるが狭い山道に一列になって馬に乗っているのでうまく身動きが取れないでいる。しかし、そこはさすが武士、馬上から素早く四〜五人を切り倒した。山賊もまともに渡り合ったら勝てないのが判っているので、戦うと見せかけて、牛車を曳いている牛の尻を刀の峯で叩いたから、牛は狂ったように狭い山道を駆け出す。馬上の武士も後ろからくる牛車に撥ね飛ばされない様に先に駆け出したり、脇の急坂に落ちたり、立ち上がった馬から落ちたりして、収拾のつかない状態になった。乱れた武士達に山賊たちが雑刀を振りかざして一斉に襲い掛かる。その時、矢が次々と飛んできて、刀を振りかざした山賊の腕や足や背中などに突き刺さった。郷子が、振り返ると志乃が網代車に隠していた短弓に矢をつがえると、驚くほどの速さで矢を放っているのだ。
短弓は、女が引けるほど柔らかいが、近距離だからあまり強く引くことなしに次々と放っている。しかも、どうやら意図的に急所を外しているようだ。殺すことよりも武士を助ける事を目的にしているのだろう。落馬した武士もその援護によって立ち直りを見せている。須美はと見ると、短い刀を持って山賊の中に躍り込むと、その周りの山賊が刀を落として逃げていく。須美の刀捌きには、全く無駄がなかった。山賊の刀を持った手を瞬く間に切っているようだ。それは、まるで男踊りのような華麗な舞を見ているような美しさがあった。武士達も馬を降りると刀を引き下げて山賊の群れに次々と戻ってきたので、山賊たちは我先に逃げ出した。
須美は、短刀を鞘に納めると、脇に差し、近くに放置された馬に騎乗するとすでに見えなくなっている牛車を追って駆け出した。重員と数人の武士もそれを追っていった。小太郎は、隊列を立て直すと一行の損傷の具合を検証した。
落馬して、軽傷を負った者もいたが、刀で切られたものは武士は言うに及ばず下僕や下婢を含めて皆無だった。
「誰も切られなかったのは、そちのおかげだ」
小太郎が、志乃に感謝した。
「お恥ずかしいところをお見せいたしました」
志乃は本当に恥ずかしそうだった。
郷子は、志乃の短弓や須美の刀の武芸は、自分より一段も二段も上だとみとめないわけに

はいかなかった。
一行が、峠を過ぎて近江国土山宿に入る手前で重員と数人の武士が網代車や食料と荷物を積んだ牛車を押さえて待っていた。
「須美は？」小太郎が重員に訊いた。
「恐らく土山宿で待っているものと思われます」
聞くところによると、重員と数人の武士が牛車に追いついた時には、もう牛は落ち着いていて静かにたたずんでいたという。
「驚嘆すべき女性だな」
小太郎が呟いた。
山賊がでるのはそれなりに理由があるのだろう。近江国に入って都に近づけば近づくほど飢饉の情況は酷くなるようだった。宿場では、物乞いが道に溢れていた。通り過ぎる村々では、稲や野菜は半分枯れたように茶緑色になっている。疲れ果てた農夫がやせ細った子供を抱えて途方にくれたように座り込んでいる。
郷子は、そうした農民を見るにつけ、自分達の持っている食料を分け与えたくなったが、あまりにも規模が大きすぎてどうにもならなかったし、自分達の食事を守るのが精一杯だった。こうした中でも、年貢を納めるために食料を積んだ牛車が都に向かって進んでいた。山賊が狙っているのは、こうした牛車なのだ。
翌朝、土山宿を出て、中山道の起点である草津までくるともう都は目と鼻の先で急に旅人の数が増えてくる。
郷子が三日月に乗って、小太郎と轡を並べて歩んでいると右手に広大な水面が見えてきた。郷子は、初め海かと思ったが、琵琶湖という日本一の湖だという。
しばらくすると、小太郎が木曽義仲の最後について話しだした。
「あの湖岸に沿ってすこし北に進むと粟津の浜というところがある。
義仲が、宇治川の戦いで敗れ、巴御前とも別れてそこまで逃げのびてきたときは、僅かに五騎となっていたそうだ。その中に今井兼平がいた。兼平は、義仲が一歳の時に預けられた乳母の子供で、二人は兄弟のように育った。そして、『死ぬ時はかならず一緒に死のう』と堅く誓い合っていたそうだ。義経軍は数千騎もいる。もうこれまでと観念した兼平は、義仲に『無名の雑兵に討たれてはあまりに無念、早く松原に入って自害されたい』と促した。義仲が、もう少しで松林に入ろうとしたところで、深田に馬の脚が取られ身動きが取れなくなった。『兼平は？』と振り向いた瞬間に矢で額を射抜かれて即死したそうだ。兼平も、義仲が討死したことを知って、馬上で太刀を口にくわえると頭から飛び降りて自害したという。ちなみに巴御前は、兼平の妹だ」
話が終わると、大津の宿に入っていた。
今日はここで宿泊し、明日はいよいよ鴨川を渡って京の都に入る事になる。

第九章　　了